

「何としても当社の従業員を守っていく」 決意を胸に3代目社長として業務にあたる

昭和46年に創業し、昨年50周年を迎えた松藤運輸倉庫(株) (千葉県市川市)。時代の変化に対応すべく、現在同社ではコンビニエンスストアへの配送や食品輸送を主軸に据えている。
創業者である父・松藤淳一氏、先代社長として長年腕を振るってきた母・松藤勝子氏に次いで、3代目社長に就任した松藤加津美氏(令和元年就任)は、「現在の当社の姿があるのは、一生懸命に働いてくれている従業員のおかげ」と考え、従業員の気持ちを大切に思いながら様々な施策を進めている。



食品輸送を担う同社の保冷車の前でポーズをとる松藤社長

■ 24時間365日体制でコンビニ配送を展開 「働きやすい職場づくり」に力を注ぐ

松藤運輸倉庫(株)は、故・松藤淳一氏が、昭和46年に松藤運輸(有)を東京・墨田区に設立したことから始まっている。設立当初は、和便器の輸送を主体に事業を展開していた。56年に株式会社化し、社名も松藤運輸倉庫と改めた。この頃からコンビニエンスストア網が広がってきたことを受けて、同社は食品輸送を手がけるようになった。現在では、コンビニへの店舗配送や食品メーカーから配送センターへの輸送を中心に、トイレ製品や一般雑貨、輸入品の輸送などを手がけている。同社では本社営業所のほかに、茨城県常総市に北関東営業所を、そしてコンビニ配送を担う拠点として船橋事業所(船橋市)を構えている。

平成6年、松藤淳一氏が亡くなったことを受けて、妻の勝子氏が同社の社長に就任した。その当時、松藤家の一人娘である加津美氏は大学2年生であった。加津美氏は、母を支えるべく大学に通いながら同社の仕事を手伝うとともに、大学4年の時に運営資格を取得。大学卒業とともに同社に入社し、トラックのハンドルを握った。淳一氏はかつて千葉県ト協市川支部の理事を務めており、協会活動にも積極的に参加していたが、勝子氏は積極的に協会活動に参加するタイプではなかったという。淳一氏の死後は、加津美氏が同社の代表として協会活動に参加するようになり、青年部などで多くの業界関係者と交流を深めていった。

加津美氏が同社に入社して10年ほどが過ぎた頃には、勝子氏に代わって同社の実務のほとんどを行うようになり、令和元年7月に加津美氏が社長に就任した。

「実際に社長に就任すると、これまでとは全く違う責任の重さを感じました。当社は昨年、創業50周年を迎えましたが、これも当社の従業員が一生懸命頑張ってくれたからだと考えています。従業員がいなくなれば、トラックを動かすことができず、当社の事業を継続することもできなくなります。今後「何としても当社の従業員を守っていく」という固い決意のもと、業務にあたっていくと考えています」(松

藤社長)

運送事業者が長年にわたって事業を継続していくためには、事故防止に向けた継続的な取り組みが求められてくる。同社では、営業拠点ごとに安全教育を実施。船橋事業所(ドライバー13人)では、24時間365日体制でコンビニ配送を展開していることから、ドライバー全員が一堂に会する機会がないため、昼勤と夜勤のドライバー向けに、それぞれ月1回ミーティングを実施。ドライブレコーダーの映像をドライバーに見てもらい、ヒヤリハット事例や物流センター内での事故事例などについて共有している。また、本社営業所(同21人)と北関東



松藤 加津美 代表取締役

営業所(同5人)では、松藤社長による個人ミーティングを実施。事故防止に向けた指導のほか、ドライバーからの要望を聞く機会としても機能しているという。

一方、ドライバーの健康づくりに関する取り組みとしては、2年ほど前から健康診断の結果を保健師に確認してもらい、コメントを書いてもらった上で、健診結果と一緒にドライバーに手渡すという取り組みを行っている。健康を維持していくためのアドバイスを保健師からしてもらうことで、ドライバーは健診結果を放置することなく、治療や生活習慣改善などに活かすことが可能となった。

さて同社では、「月60時間超の時間外割増賃金率引上げ(25%→50%)の中小企業への適用」(5年4月1日～)と、「ドライバーへの時間外労働の上限規制(年960時間)の適用」(6年4月1日～)を見据えて、労働時間削減に取り組んでいる。

船橋事業所では、休日の前日の最後の輸送を他のドライバーに代わってもらうなどの労働時間削減策を検討。また、比較的高齢のドライバーが多い本社営業所では、これまでよりも休日を1日多く付与するなどの方策により、ドライバーの労働時間を抑制するとともに、休みを取得しやすい環境の整備を進めていきたいとしている。



同社ではいち早く「働きやすい職場認証制度」一つ星を獲得するなど、労働環境の改善を進めている



大手コンビニエンスストア店舗へのルート配送や、食品メーカーから配送センターへの輸送などを主体としている



女性ドライバーも活躍する同社では、日々安全性の高い輸送を積み重ね、設立以来 50 年の歴史を刻んできた

「近年では特に若い人の間で、収入増よりも週休2日を望む声が強くなっています。若いドライバーに気持ちよく働いてもらえるような職場環境の整備に向けて、配送ルートの組み換えなどによって対応していきたいと考えています。一方で、『2024年問題』への対応も急務です。当社でも荷主企業に対して運賃改定交渉を進めていますが、現時点で協力して下さった荷主企業は全体の30%程度に留まっています。ドライバーの給与を下げることなく、そしてドライバーの労働環境を少しでも良いものにしていくために、今後も様々な努力を続けていきたいと思えます」(同)

さて、同社ではドライバーの定着率が比較的高いという。その理由として、「同社での働き方が、ドライバーのライフスタイルに合わせている」ということが挙げられる。

本社営業所に所属するあるドライバー(27歳)はダーツを趣味としており、国内で開催される大会にも出場するほどの腕前を誇っている。彼は13時に出勤し、22時頃まで勤務。仕事が終わると、着替えてダーツパーに出かけ、ダーツの腕を磨いている。また、別のドライバーは、仕事を終えると毎日のようにスポーツジムに行き、汗を流している。

過度な長時間労働は従業員を疲弊させるとともに、意欲の低下にも繋がる。私生活を充実させることで仕事へのやりがいや生まれ、それとともに仕事のパフォーマンスも高まっていくのである。

「当社ではドライバーの勤務時間がまちまちになっています。しかし、一定でないからこそ、ドライバーからの要望をできるかぎり聞き、勤務時間を調整することで、ドライバーの『ワーク・ライフ・バランス』を実現させることができます。個人ミーティングなどを通じてドライバーからの要望に耳を傾け、ドライバーにとって居心地の良い会社にしていくことで、従業員の離職を防いでいきたいと考えています」(同)

ちなみに、同社のドライバーの多くが、会社や営業所の近くに住んでいるという。それは、公共交通機関を利用することができない早朝・深夜の出退勤に対応するためでもあるが、会社の近くに住んでいるからこそ、オンとオフの切り替えがスピーディーにできるという利点もあるようだ。

一方で、多くのドライバーが会社や営業所の近くに住んでいることで、緊急時対応がスムーズに行えるという副次的効果もある。平成23年に発生した東日本大震災の時には、地震直後にほとんどのドライバー

が同社に出勤し、物流を維持するために奮闘したという。

「当社の扱っているコンビニ配送や食品輸送は、人々の日常生活を支える重要な役割を担っています。震災によって燃料不足が深刻化し、配送センターに入庫する他社のトラックが動かなくなるような状況に陥っても、当社では協会活動で培ってきた人脈を活かし、市川市内の事業者のご協力をいただき、輸送を継続させることができました。『トラック輸送は、人々の暮らしと経済を支えるライフラインである』との意識を決して絶やすことなく、輸送の維持に努めていきたいと考えています」(同)

トラック輸送を維持していくためには、次世代を担うドライバーの確保も欠かすことができない。同社では、令和2年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大の中で、求職者からの応募が増加したという。同社では業界未経験者の採用も積極的に行っており、飲食業などコロナ禍で深刻な影響を受けた業界からの応募が目立ったという。

「求職者の中には、コンビニ配送のトラックの運転の際に必須となる準中型免許を取得した上で当社の門を叩く人も少なくありません。自分がドライバーとしての仕事を行う上でどんな資格が必要となるのかを勉強し、前もって取得してから面接に臨むような、やる気のある方は、入社してからも長い間当社で活躍してくれそうです。なお、業務に必要な免許の取得については、費用の全額を会社が負担する形で取得を促しています」(同)

さて、松藤社長は今年5月19日付で、初代部会長の柳澤照美氏(柳澤運送(株)代表取締役)に代わり、千葉県ト協女子部会長に就任した。松藤社長に女子部会長としての抱負を伺うと、「部会員拡大に全力で取り組んでいきたい」と答えた。

「現在女子部会には36人が在籍しています。女子部会は自己研鑽の場であるとともに、同業他社の皆様とのネットワーク作りの場としても有効に機能しています。実際、女子部会のメンバーはみんな仲が良く、ゴルフと一緒にプレーするなど交流を深めています。女子部会に参加いただけるのは経営者の方だけではなく、例えば運行管理の仕事に就いているなど管理者の方であればご参加いただけます。多くの仲間たちと相談し合える場として、そして新しい仕事を得ることのできる場として、多くの皆様の女子部会へのご参加を心よりお待ちしております」(同)

ホットにゆーす

■新たに覚えた海の楽しみ 人生観を変えた「スキューバダイビング」

松藤社長は平成30年から、スキューバダイビングを始めた。

もともと松藤社長のご主人がダイビングをしていたものの、松藤社長自身は海に苦手意識があったという。それでも、ご主人の誘いを受けてダイビングをしてみると、ダイビングの魅力にあっという間にとりつかれてしまったという。現在では沖縄や石垣島などにダイビング旅行に出かけるほか、月に1度のペースで勝浦や行川、館山の海に潜りに行っているという。

「海の中では、ひたすらダイビングに集中できます。こうした時間が楽しみで、ダイビングをしに行く機会が増えています」(同)



松藤社長は4年前に始まり、現在では月に1度のペースで海に潜っている

企業プロフィール

松藤運輸倉庫株式会社

代表取締役 松藤 加津美

本社 千葉県市川市田尻 4-1-39

従業員 48人(ドライバー39人)

台数 32台